

池田SGI会長の詩における母親像

二宮由美

はじめに

池田氏は一九九五年に「世界桂冠詩人」の称号を世界詩歌協会から授与されました。バートン・ワトソン (Burton Watson) 氏の翻訳による“*Songs from My Heart*”が主な受賞のきっかけとなりました。池田氏の詩作は五百六十点を超え、その総行数は十三万行になります。

初期の作品としては即興詩「地湧」(一九四七年)があります。この詩は六十年前の夏、初めて恩師・戸田城

聖氏に出会った時の感動の気持ちを表現した作品です。また香峯子夫人への相聞歌(一九五一年)にみられるように、自身の人生において決定的な役割を果たした人との出会いの印象や感情を「詩」という方法を用いて表現する池田氏は生来の詩人ということができるといえます。

今回は池田氏の作品における女性像とくに「母親」がどのように描かれ、どのような諸相を呈しているか、それらがどのような思想・哲学に裏付けられているのかを考えてみたいと思います。

詩人クリシュナ・スリニバース氏は詩集『ブッダ——人間主義の勝利』の一節で、ブッダの母マーヤー夫人がブッダを産み落としたのち、亡くなっていることを次のように詩っています。

二千五百年の昔

アジアの寶石であるインドに於いて

シツダルタは誕生した。

清浄なる全人類の救世主は

カピラバストウ近在のルンビニー園にて

王シユッドーダナと后マーヤーの子として誕生したのであった。

だが、母は亡くなる——

その皇子

すなわち三十二の相と八十の種好を備えた世継ぎを

叔母マーハー・ブラジャーパティーの手に委ねて。

(こうしてシツダルタは) 溢れる愛情と贅に包まれて

育ち

ヤシヨーダラーと結ばれ、ラーフラが生まれた⁽¹⁾。

人にはその父と母がいて、基本的にはその母の胎内で約十カ月間、宿ったあと、この世に生を受けます。太古の昔から現代にいたるまで、出産は、母にとっても子にとっても命がけの作業といえるでしょう。またそのため女性は生命を育み、慈しむ心を本来、有しているといえます。

1 生命の尊厳を護る者としての女性

池田氏は「女性」について、詩「生命の尊厳を護る者へ」のなかで、次のように述べています。

自由と平和と尊厳と／この象徴の戦士が 女性であつた

太古の その昔から／生命を無上のものとして／こよなく慈しみ／心くだきつつ 育てつつ／一すじに生きぬいた 貴い性^{まが}——／それを 私は女性

と呼ぼう⁽²⁾ (傍線は引用者による。以下同じ)

「仏法の教えでは、一切衆生の生命の中に、仏性(仏の性分、本性)が具わっており、そのため人間の生命そのものを無上の存在とする生命尊厳の思想があります。女性は出産という機能を有しているため、この生命尊厳の思想を身をもって理解しやすい立場にあります。続いてこの詩の中では、女性を「純粋な平和主義者」と表現しています。生命を無上のものとして慈しみ育てる女性は、この詩の題「生命の尊厳を護る者」であり、従って平和主義者であります。女性をこのように位置づけるところに池田氏の詩における女性像の特質があるといえるでしょう。

では次に池田氏の作品において「母」がどのように表現されているか考えてみたいと思います。

第一に、先に述べた「女性像」と共通する概念、即ち「無償の愛」と「慈母の愛」によって「生命の尊厳を護る尊い性」として表現されている点があります。その例をあげると次のようになります。

自ら植えた慈愛の種が(中略)芽ぶき すくすくと
伸び／美事な大輪を咲かせゆくことを／無二の欲
びとする尊い性⁽³⁾

母よ／慈しみ深き母たちよ／生あるものを／どこ
までも慈しみ はぐくむ／女性なるものの特質
誇り／その無償の愛(中略) 作為もなく 無理も
なく／おのずからなる発露たる／ああ尊き無償の
愛⁽⁴⁾

おお 勁きかな 母の腕は！／おお 豊かなるか
な 母の心は！／我が子のすべてを包み はぐく
む／この大海のごとき慈愛がなければ／人類の存
続は／至難であつたにちがいない⁽⁵⁾

あなたのその慈しむ愛の力を／断じて孤立させて
はならない／それはなぜか——／盲愛では不幸の
霧りが漂うだろう／故に連帯と目的と理性に裏づ
けられた／慈母の愛のみが／苦しみ嘆く野蠻の未

来に／点晴せいでいの光線を入れることができるからだ／
その地道なる点火が／ただ一つの道として／生命
の尊厳を／この世から真実に防衛できると思うか
らだ⁽⁶⁾

2 平和主義者としての母

第二に「母」のイメージが戦争を絶対悪とする平和
観として表現されている点です。例をあげると次の通
りです。

侵略し 蹂躪じゆうろんし／抑圧し 略奪した／痛ましい歴
史の傷跡／子らの叫びは／今も蒼穹そうきゆうの果てにふる
え／母の涙は／滯みおとなつて大地を流れる⁽⁷⁾

おなじ人間が おなじ子供が／なぜ相争うのか／
なんと惨めなる人間の業——／こんな愚かな事業
から／人間は そして文明は／いまなお解放され
ていないのだ⁽⁸⁾

池田氏は随筆「母の慈愛」のなかで次のように記し
ています。「あの悪夢のような戦争の悲劇は、わが家も

その例外ではなかった。四人の兄たちがようやく成長
し、いよいよ母に代わって働きたしたころ、天皇のた
め、国のためといいながら、兄たち四人とも次々に応
召していったのである。こんなとき、軍国の母といわ
れ、涙ひとつこぼさず、笑顔をもって外地に送る母の
心境は、どのようであつたらうか⁽⁹⁾と。

池田氏の生命尊厳に基づく平和観は、その母の姿に
よつて確立したものであり、その関係性において母が
果たした役割は決定的といえます。この母と平和観の
形成の関係については、池田氏が編んだ対談集『二十
一世紀への対話』の共著者アーノルド・J・トインビ
ー氏についても同じような点が指摘できます。A・
J・トインビー氏は次のように述べています。「——戦
争がもたらした母たちの悲嘆の涙は、絶対に忘れられ
ない。だから、私は平和のために探究を続けてきた⁽¹⁰⁾」
と。平和観の形成において母が果たした役割という点
で、池田氏とA・J・トインビー氏は等しく共有して
いた部分があることがわかります。

そして池田氏の作品の中に、氏の「平和への原点」

が明示されている部分があります。

私の平和への原点は／その魔性のツメに／わが長
兄の命を奪われた／少年の日の母の悲しみの顔／
そして恩師を獄につないだ／軍国主義への限りな
い憤り⁽¹⁾

この詩から池田氏の「平和への原点」が幼き日、長
兄の戦死を知らされた時の「母」の悲しみの顔、そし
て軍国主義という悪への憤りであったことがよくわか
ります。

3 「母」の曲をめぐって

池田氏が母・一（いち 一八九五―一九七六年）のために
書いた詩にメロディーがついた「母」の曲があります。

一、 母よ あなたは

なんと不思議な 豊富^{ゆたか}な力を

もっているのか

もしも この世に

あなたがいなければ

還^{かえ}るべき大地を失い

かれらは永遠^{とわ}に 放浪^{さす}う

二、 母よ わが母

風雪に耐え 悲しみの合掌^{いのり}を

繰り返しした 母よ

あなたの願いが翼となって

天空^{おそら}に舞いくる日まで

達者にと 祈る

三、 母よ あなたの

思想と聡明^{かしこ}さで 春を願う

地球の上に

平安の楽符^{しらべ}を 奏でてほしい

その時 あなたは

人間世紀の母として 生きる

この曲は、母の御恩に報いようと母・一さんが亡く
なる一カ月前に完成した曲で、現在ではオーストリア
の音楽家ユッタ・ウンカルト・サイフェルト氏（元文部
次官）、ロシアのナターリヤ・サーツ氏（元モスクワ児童
音楽劇場総裁）、そしてブラジルのピアニスト、アマラ
ウ・ビエイラ氏によって広く歌われ、演奏されてい

ます。

この「母」の曲は三番十九行の歌詞ですが、この歌詞のもとになった長編詩「母」（一九七一年）があります。この長編詩「母」は全二十六節百八十四行から成っています。長編詩「母」をもとにしてつくられた「母」の曲のテキストは、量としては約十分の一になり、池田氏の母・一さんへの愛情が凝縮されたテキストとなりました。そして一さんへの想いが凝縮したこの「母」の曲は、母・一さん個人にとどまらず、普遍性を有する人類共通の「母」への讃歌となり、聴く人の心の琴線を大きく深く揺さぶる名曲となりました。

同じ頃、一年半前に母を亡くした日本の作家・井上靖氏はこの「母」の詩の印象を「母は本當に有り難いものだと心に沸き起こってくる。母がもつ無限の愛の深さに胸打たれる」⁽¹²⁾（趣意）と述べています。池田氏はこの井上靖氏と昭和五十年から五十一年にかけて計二十四通の書簡を交わし、『四季の雁書 往復書簡』を著しました。その「あとがき」のなかで「井上さんと私とは、立場も年齢も、歩んだ道も異っていますが、あ

りがたいことに、人間としての爽やかな共鳴が響きあったことは疑いませ⁽¹³⁾ん」と記しています。池田氏と井上氏の間にあつた「人間としての爽やかな共鳴の響き」これこそが池田氏の詩における女性と母のイメージを通して読み手に伝わる詩心ではないかと考えます。

池田氏の詩における女性と母のイメージは生命尊嚴の思想に裏づけられており、そのイメージは平和へと結実し昇華しています。このことは女性と母が世界を変えろということの意味しています。池田氏の詩における女性と母のイメージは、このことを読み手にメッセージとして伝えています。

4 むすびに

以上、池田氏の詩における女性と母の特質とその裏づけとなる思想について考えてまいりました。「生命の尊嚴を護る者」としての女性、そして平和主義者としての母、という二点が池田氏の詩における女性と母親像の特質です。

池田氏は長年にわたり二十一世紀を「生命の尊嚴の

世紀」に「女性の世紀」にと主張してきました。本稿で池田氏の詩における女性と母の特質を検討した結果、二十一世紀をそのように標榜してきた池田氏の思想が詩作の中に明確に提示されていることがわかります。

池田氏は詩「詩心の復権が人類を覚醒」のなかで「言葉が、生きた言葉」となり／人々の胸奥に力強く響く時／言葉は真に力をもつ⁽¹⁴⁾」として詩の力について述べています。また「詩人の胎動と詩心の復権こそ／時代に冷涼な空気を送り／人類に覚醒の覇気を与えるのだ⁽¹⁵⁾」と詩心の復権の重要性を説いています。

そして「詩人の眼差しは『心』に向けられている。(中略) 変転する現実世界の事象を貫く大宇宙の不変なる法則を見詰める。(中略) そして、時には、万人を結び合う、見えざる生命の紐帯を覚知する——私は、この豊饒なる精神の泉を詩心と呼ぶ⁽¹⁶⁾」としています。

人の心の奥に秘められた、感動し共鳴する心情である琴線があるとしたら、池田氏は自ら巨人のようなたく強い心の琴線を振るわせ、世界にその共振を広げ、詩心の復活を呼び起こしているのではないかと考えら

れます。そしてそれは人と人を結びつけるという詩がもつ真の力によって、分断がもたらした現代の悲劇に対抗すべく、世界平和のために不可欠な要素であると考えられます。

注 (タイトルの後ろの年数は作品が書かれた年)

(1) Krishna Srinivas, *The Buddha: Victory of Humanism. An epic based on the life and work of Dr. Daisaku Ikeda*, Gandhi Media Center, New Delhi, 2000, pp. 10-11. (三好楠二郎訳)

(2) 詩「生命の尊厳を護る者へ」(一九六八年)『池田大作全集』三九巻、聖教新聞社、九六頁。

(3) 詩「母の詩」(一九八七年)『池田大作全集』四〇巻、聖教新聞社、三五七―三五八頁。

(4) 同、三五五―三五六頁。

(5) 同、三五六―三五七頁。

(6) 詩「母」(一九七一年)『池田大作全集』三九巻、聖教新聞社、一五四頁。

(7) 詩「敬愛するロケッッシュ・チャンドラ博士に捧ぐ、悠久なれ! 詩心の調べ」(一九九二年)『池田大作全集』四三巻、八一頁。

(8) 前掲、詩「母」一四六頁。

(9) 「母の慈愛」『愛蔵版 女性抄』(一九七七年)二四三

～二四四頁。

- (10) 「隨筆 人間世紀の光 126 世界の識者との対談の思い出」聖教新聞二〇〇七年三月十五日付。
- (11) 詩「尊敬するヴァイツェッカー大統領に捧ぐ 新生ドイツの良心を讀う」(一九九二年)『池田大作全集』四三卷、四六頁。
- (12) 「烈日の如き人生への思い」井上靖・池田大作『四季の雁書』潮出版社(一九七七年)、六七～六八頁。
- (13) 「あとがき」井上靖・池田大作『四季の雁書』。
- (14) 詩「世界詩人会議」メキシコ大会に贈る 詩心の復権が人類を覚醒」(一九九九年)『池田大作全集』四三卷、五七二頁。
- (15) 同。
- (16) 詩「詩——人類の展望——詩心の復権への一考察」『友誼抄』(一九八八年)三八四頁。

参考文献

- ・ Daisaku Ikeda, *Songs from My Heart*, translated by Burton Watson, Weatherhill
- ・ Daisaku Ikeda, *Restoring our connections with the world. The Japan Times*, October 12, 2006
- ・ 詩「地湧」(一九四七年八月十四日)『青年の譜』一〇〇頁
- ・ 『香峯子抄』(二〇〇五年)主婦の友社、六二～六四頁

・ 詩「我が深く敬愛するインドの友に贈る 月氏の曙 地涌の讃歌」(一九九二年)『池田大作全集』四一巻、三六三～三九二頁

・ 詩「若きインドの指導者 ラジブ・ガンジー首相に贈る 獅子の国 母の大地」(一九八七年)『池田大作全集』四一巻、九～二三頁

・ 詩「永遠なれ! 母の勝利の太陽 ソニア・ガンジー夫人に贈る」(一九九七年)『詩集 私の心の世界』(一九九九年)聖教新聞社、三二七～三五〇頁

・ 詩「旅立ちの朝に インドの太陽の娘 プリヤンカさんに贈る」(一九九七年)『詩集 私の心の世界』三二～三二九頁

・ ヘイゼル・ヘンダーソン、池田大作『地球対談 輝く女性の世紀へ』(二〇〇三年)主婦の友社、五〇～五一頁、二四四～二四五頁

・ パートン・ワトソン博士 アメリカ・コロンビア大学元教授「特別寄稿 池田SGI会長とともに歩んだ三十年の翻訳人生」『大白蓮華』二〇〇五年四月、五〇～五五頁

・ マハトラ博士 インド・国立図書基金前会長「人類愛を呼び覚ます詩心の世界——池田博士のオリヤー語版詩集に寄せて」『大白蓮華』二〇〇五年七月、二四～二九頁

・ 前原政之「池田大作 行動と軌跡」(二〇〇六年)中央公論新社、一五頁

- ・池田大作『創造家族』（一九七六年）講談社、二二七頁
- ・『愛蔵版 女性抄』（一九七七年）第三文明社、二四三～二四四頁
- ・井上靖・池田大作『四季の雁書』（一九七七年）潮出版社、「卒業式のこと・女性の生き方」一八九～一九七頁、あとがき
- ・池田大作『大道を歩む』（一九九八年）毎日新聞社、「母の思い出と『母』の曲」一一二～一二二頁、「世界桂冠詩人」三〇二～三二一頁
- ・池田大作『母の曲』（一九九八年）聖教新聞社、「すべての母へ『母』の曲」二七～三七頁
- ・グラフSGI、二〇〇六年十二月号

二回の桂冠詩人

- ・一九八一年「桂冠詩人」世界芸術文化アカデミーから事務総長スリニバス博士
- ・一九九五年「世界桂冠詩人」世界詩歌協会から会長スリニバス博士

（にのみや ゆみ／東洋哲学研究所研究員）